

コンディヤックの視覚論 「知覚の成立」の議論は一体何を論じているのか？¹

Théorie de la perception chez Condillac

山口裕之

はじめに

17世紀末から18世紀にかけての知覚論では、「知覚の成立」、ことに視覚による対象認識の成立のメカニズムが盛んに論じられた。視覚の器官である目は身体上にある。ところが、視覚においては、自分からは離れたところにある対象が、身体上（目の上）ではなく、まさにその位置において見て取られる。どうしてそのように向こう側に見えるのか、ということが「謎」だと考えられ、そうした形で視覚が成立するのはいかにしてかが論じられた。そのもっとも有名なものの一つがバークリの『視覚新論』であることは論をまたない。

それら近代哲学において論じられた「知覚の成立」の議論は、現代の知覚心理学の先駆であると解釈されることが普通だろうし、実際のところ、そうした哲学における知覚論で論じられた枠組みが現代の心理学でもかなりの程度、そのまま受け継がれているようにも思える。たとえば、近代哲学において、視覚の像はそもそも「心の変様」であり「心の内側にある」ものだと考えられたのにほぼ対応して、現代の心理学ではそれは「脳が構成するもの」であり、「脳の内側にある」と考えられている。

ところが、現代の心理学の立場から、哲学的な議論を振り返ってみると、奇妙に思える点はいくつもある。果たして、近代哲学における「知覚の成立」論は、現代的な意味での心理学的問題を提起し、その解決を図ったのか。本論ではそうした点について、バークリの影響を受けつつ「知覚の成立」を主題的に論じたコンディヤックに即して、考えてみたい。

1. モリヌクス問題

17世紀末から18世紀にかけての「知覚の成立」論、とくに視覚による外的対象の認識の成立の議論は、「モリヌクス問題」とそれへの応答という形で展開したとも言える。周知のこととは思いますが、まずは「モリヌクス問題」を簡単に確認するところから始めたい。

ロックは、『人間知性論』第2巻第9章（知覚について）で、感覚が与える観念は、無意識的な判断によって変更されることを主張する。ロックによると、球体が目の前にあるとき、我々

¹ この原稿は、哲学会第47回大会のシンポジウム「感覚・知覚論再考—バークリ『視覚新論』三百年—」（2009年11月1日於東京大学）で行った口頭発表をもとに作成した論文である。

が視覚において受け取る感覚は「陰影のある平たい円形」である。それが球体に見えるのは、習慣によって無意識化した判断のおかげだ、というのである。

それとの関連でロックは、友人のモリヌークスが手紙で言ってきた問題を紹介する。要するに、「先天的な盲人がいるとする。その盲人は、触覚によって立方体と球体を区別することができる。彼が突然に目が見えるようになったとすると、彼は視覚のみによって、立方体と球体とを区別できるだろうか」という問題である。

モリヌークス自身は、できないはずだと考える。その盲人は、触覚において立方体と球体として感じられているものが、視覚においてどのような仕方で見えるのかを知るための経験をしていないからである。そしてロックもこの意見に賛成し、視覚が成立するためには経験的な判断が必要であると論じる。

パークリもまた、モリヌークスの問題提起に対して、「生まれつきの盲人が視覚を与えられても、最初は、視覚による距離の観念を全く持たないだろう」と論じる(『視覚新論』§41, p43)。視覚の感覚はもともとは眼の中、あるいは心の中において感じられるのであって、視覚に距離や大きさなどの観念を与えるのは触覚なのだ²。

その後、チェゼルデンという外科医が、先天的な白内障の患者(14歳前後だったという)に開眼手術を施した。ヴォルテールが『ニュートン哲学要綱』(第7章)で紹介したため、この手術はモリヌークスやロックの主張とともに広く知られることになった³。

ヴォルテールによると、その患者は手術後しばらく、視覚のみによっては外的対象の大きさや形などを識別することができなかった。最初のうちは、対象は目に触れているように感じられたが、二ヶ月ほどの間、触覚を用いた試行錯誤を行った結果、視覚によって物の大きさや形を判断できるようになった、という。

当時、こうした例から、モリヌークスやロックの主張が正しく、視覚によって外的対象を認識するためには、触覚による探求を主とするような経験が必要である、と解釈された。

2. 『人間認識起源論』におけるコンディヤックの応答

コンディヤックは、この問題について、『人間認識起源論』では、珍しくロックの見解を批判している。まず彼は、ロックが、視覚において受け取る感覚を「陰影のある平たい円形」としたことに反論する。我々は球体を前にしたときに平たい円形など見ることはなく、まさしく

² 「触覚によって、距離や触覚的形や固さとして知覚される特定の観念を、特定の視覚による観念と結びつけられたものとして、長期間にわたって経験してきたので、私はこれらの視覚による観念を知覚するやただちに、自然の慣れ親しんだ通常の経過によって、いかなる触覚的観念が次に続きそうであるかを結論する」(『視覚新論』§45, p.46-7)。

³ 「1729年、手先の器用さと精神の明敏さを兼ね備えた高名な外科医であるチェゼルデン氏は、ある先天盲の患者が生まれて以来その目の中に白内障と呼ばれるものが形成されたのだらうと疑い、それを軽減することでその患者に視覚を与えられるのではないかと考え、手術を申し出た。…手術が行われ、成功した。この若い患者は、十四歳前後だったが、初めて光を見た。彼のした経験は、ロックとパークリが予測したことを完全に確証した。彼は長い間、大きさも距離も位置も形さえも区別しなかったのである」(Voltaire, p.319)。

立体感のある球体を知覚するというのだ⁴。

実際のところ、触覚によって確認したからといって見え方が変わるなどということはない。視覚像と判断とが混じり合っただけで渾然一体になることなどありえない。たとえば、うまく立体的に描かれた絵を触ってみて、間違いなく平面だと判断したとしても、やはり立体的に見えるその見え方は変わらない⁵。

平面的な像を立体だと解釈する判断が習慣化し無意識化したというなら、その判断はもともと意識的であったはずで、だとするともう一度意識的に繰り返してみることもできるはずだ。しかし、どんなに注意深くしても、平たい円形など見えないから、そんな判断をすることもできない⁶。

ではなぜチェゼルデンの患者は、二ヶ月間、まともなものを見ることができなかったのか。コンディヤックによると、それは視覚の器官が不完全な状態だったからである。眼球という器官を使いこなすためには、それを動かす筋肉（眼球の向きを変える筋肉、瞳孔を収縮させる筋肉、水晶体の焦点を調節する筋肉など）を協調して運動させるための訓練、ないし経験が必要だからである⁷。これらの筋肉が協調して運動しないことには、そもそも網膜像がきちんと結ばれず、視覚の知覚も成立しない。

付言すると、コンディヤックは、後に「大きさの恒常性」と呼ばれることになる現象についても取り上げている。たとえば、近くにいっても遠くにいっても人間は同じ大きさに見え、網膜像が小さくなっていくのに比例して小さく見えることはない。パークリらは、こうした現象は経験にもとづく判断の結果であると主張するのだが⁸、コンディヤックはこれを、その対象とそれ

4 「球体を見るときに目の中に描かれている映像は、さまざまに照らされ色づけられた平たい円形にすぎないということ、右の[ロックの]推論全体は想定しているが、これは正しい。しかし、それはさらに次のことをも想定しているのであるが、これが私には間違っていると思われるのである。その間違った想定とは、それゆえ魂の中で生じる印象もまたこのような平たい円の知覚しか我々に与えないのだということである」(『起源論』I,VI,§2,p.54/上p.231)。「私自身の経験に照らして言えば、球体を見るときには、私は平たい円形とは別の何かを見ているのである」(『起源論』I,VI,§3/上p.232)

5 「私が浅彫りのレリーフを見る。私は、それが平坦な表面に描かれていることを疑い無く知る。それに触ってみたのだ。しかしながら、そうと知っていても、触る経験を何度も繰り返してみても、また可能な限りの判断を以てしても、自分が凸状の形を見ているという感じは全く妨げられないのである。なぜこうした見え方が継続するのだろうか。[ロックらの説では]ある判断のお陰で、私は物を、感覚に与えられたその物の概念とは全く違うふうに見るといえるが、それではなぜ、こうした判断のお陰で、私にはこの概念[レリーフではなくて絵であるということ]と一致するように見える、といったことがないのか。また、遠くに見える建物が四角いということを知っているし、そう判断するにもかかわらず、それが丸く見えることがあるといったことや、その他のたくさんの例についても同様に推論することができる」(『起源論』I,VI,§3,pp.54-5/上p.233)。

6 「第三に、ロックの見解をそれだけで破壊するのに十分な理由がある。それは、そうした種類の判断を、我々は決して意識することができないということだ。…判断した直後にそれを忘れてしまうことがあるというのは真実だ。しかし、その判断を反省の対象にし続けているときには、それについての意識は非常にはっきりしているので、そうした判断[をしたこと]を疑うなどということはいかならない」(『起源論』I,VI,§4,p.55/上p.234)

7 「光の動きに従うために、目の諸部分が絶えず極めて多様に、また敏捷に変様しているということは、長い間の訓練が目の調節機構をしなやかで容易なものにしてきた限りにおいてなのである。白内障が治療されたこの若者の場合は、これは当てはまらない」(『起源論』I,VI,§16,p.59/上p.249)。

8 「かなり遠くに離れている諸対象の距離について、我々が行う判定は、感官の作用であるよりも、むしろ経験に基づく判断のはたらしきである」(『視覚新論』§3,p.21)。

を見る我々との間にはさまざまなものが介在しているからだ、と主張する⁹。視覚は触覚の教えを受けて距離や大きさを判断できるようになったのではなく、視覚に含まれる情報のみによってそれらの判断ができるというわけである。

また、別の箇所では、器官が完全に成立した状態で崖っぷちで生まれた人間は、落ちるといふ経験をやる前に、つまりは視覚認識のみによって、崖が危険であることを認識できるだろう、という思考実験をしてみている¹⁰。

このように、『人間認識起源論』でのコンディヤックは、視覚による距離や大きさなどの認識が触覚を媒介とする判断の無意識化によってなされるという説を、徹底的に批判しようとするのである。

3. 神経科学の知見¹¹

こうしたコンディヤックの主張は、我々の（あるいは少なくとも私の）日常的な経験に照らして考えると非常にもっともらしい話である。そればかりでなく、現代の心理学や神経科学の知見から見てもうなずけるものだと思われる。先天的な盲人に開眼手術をしてもなかなかものを見ることができるようにならないのは、脳の視覚野の神経系の形成不全のせいである、つまり（広い意味での）視覚の器官の不備のせいであることが明らかになっている¹²。

ヒューベルとウィーゼルがネコを使って明らかにしたように、正常な脳の視覚皮質では、「方位選択性ニューロン」がコラム構造を形成している。つまり、ある特定の方向に傾いた線分を見せたときにのみ反応するニューロン（神経細胞）が、おのおのコラム状の集団を作って皮質上に規則正しく円状に配列している（Hubel & Wiesel）。

こうした構造は、生まれたばかりのネコには見られず、生まれてからの光刺激によって形成される。生まれてすぐに目をふさいで育てたネコの脳にはそうした構造は形成されず、線分に反応するニューロンも見出されない。また、縦縞しか見えないような環境で育てると、縦縞に反応するニューロンは形成されるが、横縞に反応するものは形成されない、などのことも知られている。こうして育てたネコは、横縞を認識することができない。

この構造の形成には臨界期があり、ネコの場合、生後三か月ごろまでに正常な光刺激を受けないと、以後回復不可能な形成不全を起こす。人間の場合の臨界期は二、三歳と言われている。

⁹ 「離れたところにいる]その人がどれぐらい離れているかを最も正確に教えてくれるのは、その人から出発する光線ではなく、私とその人にある諸対象から出る光線であるということが真実である。私とその人との距離についての観念を与えるのはそれら諸対象である」（『起源論』I, VI, § 10, p. 56 / 上 p. 240）。これは後の J.J. ギブソン（1904-1979）の説を先取りする主張である。ギブソンによれば、対象までの距離やその大きさは、対象が置かれている空間全体のテクスチャの勾配によって知覚される（J.J. ギブソン, p. 177）

¹⁰ 『起源論』I, II, § 78 の注 p. 29 / 上 p. 125。これは、E.J. ギブソン（上のギブソンの妻）の「視覚的断崖」の実験を思わせるものである（E.J. Gibson & Walk）。

¹¹ 経験論哲学と現代の神経科学、認知科学との関連については、拙著『認知哲学』第2部などを参照。

¹² コンディヤックは網膜から脳へ伝わる神経についても言及しているが、神経系の不備についてはとくに考察していない。当時、神経系の仕組みや働きについては何も分かっていなかったため、それはやむを得ないことであろう。

「方位選択性ニューロン」のコラム構造はおそらく形の認識にかかわる構造なのだと思うが、両眼視にかかわる構造としては、「眼優位性コラム」がある。視覚皮質には、左右いずれか一方の眼からの入力だけを処理する部分が交互にモザイク状に並んでいる (Le Vay et al.)。それが「眼優位性コラム」である。こうした構造も、方位選択性ニューロンのコラム構造と同様、後天的に形成される。

要するに、チェゼルデンのケースのように、先天的な白内障の患者が 14 歳前後になったときに開眼手術を施しても、眼球のみならず、脳の神経系も形成不全を起こしているがゆえに、視覚の知覚は完全には成立せず、光や色は見えるかもしれないが、ものの形は分かりにくいとか全く分からない、という状態になるはずである (鳥居, 鳥居&望月)。こういう状態では、いくら触覚の助けを借りようと、視覚によって対象までの距離を測ったりものを立体的に見たりできるようにはならない¹³。

付言すると、正常な発達過程において上記のようなコラム構造が形成されるためには、理論上は光刺激のみで十分で、触覚の助けなどは不要ようである。マルスブルクによると、こうした構造の形成は、ヘップ学習 (同時に活性化したニューロンの結合強度を強化する学習方式) にもとづくニューラルネットモデルで説明できる (Malsburg)。要するにこれらの構造は、生後に形成されるとはいえ、意識的な経験の結果ではなく、生物学的な発生過程の一環として形成されるといったほうが適切である。

4. 『感覚論』での (しないほうがよかったかもしれない?) 自己批判

このように、開眼手術をしても視覚の器官が不備なはずだというコンディヤックの主張は、神経科学の知見を参照しても、もっともらしいと思われるのだが、彼は、後の『感覚論』において、『人間認識起源論』での議論を自己批判し、ロック・パークリ説に与することになる¹⁴。ル・ロワによると、これはデイドロが『盲人書簡』¹⁵の中で、コンディヤックの主張がパークリ的な観念論に陥っているのではないかと指摘したことによる¹⁶。たしかにコンディヤックは、『人間認識起源論』の冒頭を、「我々は天に昇ろうと地獄に落ちようと、自分自身の外に決

¹³ 手術後どれぐらい視覚が獲得できるかということは、手術前に白内障がどれぐらい重度であったか (どれぐらい視力があつたか) ということと相関がある。手術前に全盲であった場合には、開眼手術をしても見えるようにならない。

¹⁴ 「我々が見ること、聞くこと、味わうこと、嗅ぐこと、触ることを学んだのだと言うことは、最も奇妙な逆説のように思われる。自然は、我々において感官を形成したまさにその瞬間から、感官を完全に使用できるようにしたと思われる。そして我々は学ぶことなく感官を行使するように思われるのだが、それは今日我々はもはやそれらを学ばなくてもよくなっているからである。／私は、『人間認識起源論』を出版したときには、こうした偏見の中に在った」(『感覚論』Dessein de cet ouvrage, p.221)。

¹⁵ 周知のごとく、デイドロはこの本の中で、視覚についての『人間認識起源論』の議論を正しいものと評価し、視覚は視覚のみによって外的対象の存在や形などを判断できると主張している。

¹⁶ 「『盲人書簡』において」デイドロは先天的盲人の発達についての議論の最中で困惑させるような比較を試み、コンディヤックの原理とパークリの原理とを思いがけない仕方で接近させたのである」(Le Roy, p.91)。「コンディヤックの原理とパークリの原理とは共通であるように思われた。『人間認識起源論』の感覚主義は、『ハイラスとフィロナスの対話』の観念論を含んでいるように思われたのである。…コンディヤックはそれを否定しようと気を使い、少なくとも自らの原理を観念論から引き離そうとした。このために、彼は一冊の本を書かねばならなかったのである。それが『感覚論』である」(p.93)。

して出ることはない」(『起源論』I, I, §1, p.6 / p.25)と書き起こしている。デイドロは、こうした主張が観念論的だというのである。

しかし、コンディヤックは、『感覚論』においても感覚が「心の変様」であるという主張を放棄しない。「心の変様」にすぎない感覚から始めて、外的対象の認識がいかんして可能であるかを論じるのである。そこで外在性の観念を与えるとされたのは触覚であった。つまり、「コンディヤックが『感覚論』を書いたのは、パークリの観念論を否定するためであったのだが、その際援用した議論は、他ならぬパークリから、ヴォルテールを経由して借りてきたものだったのである」(Le Roy, p.116)。

とはいえ、『感覚論』は、五感それぞれが我々に与える認識を考察するために、「内的な組織構成が我々と同じであるが、その精神はいかなる種類の観念も持たないような立像を想定」(『感覚論』, Dessein de cet ouvrage, p.222)し、そうした立像に感官を一つずつ与えていくという独特の思考実験を遂行する点に特徴がある。

『人間認識起源論』での議論が日常的経験に根差した常識的なものであったのに対して、これはある意味、異常な想定にもとづく議論である¹⁷。そうした思考実験は、「白紙状態」からの認識の獲得順序を描くような形で展開されるが、そうした議論が一体何を論じているのか、というのが今回私の考えたいことである。

5. 『感覚論』における視覚論は一体何を論じているのか

『感覚論』は、「嗅覚のみに限られた人間」についての検討から始まり、聴覚、味覚、視覚、触覚と進んでいくのだが、今回は視覚による外的対象の認識と触覚との関係が主題であるから、視覚と触覚、および両者の関係についての議論を取り上げることにする。

コンディヤックはまず、視覚が与える感覚は光と色のみであり、それは心の変様であることを主張する¹⁸。そして、視覚の最初の状態は「光る雲」のようなものであるともいう¹⁹。

とはいえ、その状態は、開眼手術を受けた先天盲患者の見る世界のように、つまり眼球の操作に慣れておらず、脳の視覚中枢にも形成不全を起こしている人の見る世界のようにぼやけている、というわけではない。より身近にイメージすると、近視の人の見る世界のようにぼやけている、というわけでもない(もしそうだとすると、世界をはっきり見させてくれるのは触覚ではなくて眼鏡である)。

彼は「内的な組織構成が我々と同じ」立像を想定しているので、視覚の器官もまた完全な状態であることが想定されている²⁰。網膜には完全な像が投影されており、その印象は視神経を

¹⁷ フーコーは、18世紀の「観光学」において盛んに論じられたこうした思考実験的な発生過程を「個別的であると同時に普遍的な発生過程という、なかば神話的な形態」とし、カントに始まる近代の知のあり方とは異なった「古典主義時代」の知のあり方を示すものであると論じる(フーコー, p.262)。

¹⁸ 「立像は、光と色とを見るにすぎず、自己の外に何ものかがあると判断することはできない、と言ってもよいだろう。／つまり立像は、光線の作用において、自己の存在仕方しか知覚しない」(『感覚論』I, X I, §2, p.245)。

¹⁹ 「私が光に対して目を開くと、まず最初には色のついた光る雲しか見えない」(『感覚論』IV, VIII, §3, p.311)。

²⁰ ただし彼は、『人間認識起源論』での自らの指摘、つまり、開眼手術を受けた先天性の白内障患者は視覚

伝わって混乱なく心へと伝えられる、ということになっている²¹。

では、視覚の最初の状態が「光る雲」のようなものだと、どういう意味なのか。コンディヤック自身の言い方を見てみる。

「最初の瞬間には、立像は混乱した仕方で見える。[視覚が与えられた]最初の瞬間から、立像は複数の色を等しく知覚するにせよ、立像はいまだそれらのうちの特定のものに気づくことはできないと私には思われる」(『感覚論』 I, X I, § 3, p.245)。

「いくつかの色が立像の網膜上に判明に広がっており、立像がそれらの色を見るときも、立像の観点からは、そうした色は実際に混乱しているのと同様に混乱して見えるのである」(『感覚論』 I, X I, § 4, p. 246)。

「色はその本性からして分離される傾向を持つ感覚である。それゆえ私は立像がいくつかの色を認識するにいたるだろうと想像する」(『感覚論』 I, X I, § 4, p. 245)。

このように、最初の状態においてすでに色の知覚が判明な形で成立しているが、それぞれの色に気づくかどうかの問題だ、ということのようである。しかもそうした気づきは、色の本性に従ってなされるのである。

一般的な哲学史(ないし科学史)では、『感覚論』でコンディヤックは、視覚による外的対象の認識が経験によって後天的に獲得されると主張した、と解釈されることが多い。しかし、ここでの議論から明らかなように、コンディヤックは、少なくとも視覚におけるものの見え方そのものの成立については論じていない。先に紹介した神経科学の知見から考えるに、新生児は外界からの光刺激を受けて、ものの見え方そのものを形成していくに違いないが²²、そういう過程については問題にしていないのである²³。

では彼は一体何を論じようとしているのか。こう考えてみると、そもそも「視覚による外的対象の認識」ということで具体的にどういう事態が念頭に置かれているのかがいささかあいまい、というか多義的なようである。つまり、「モリヌークス問題」が一体何を問題にしているのかがあいまいなようである。整理してみよう。

もともとモリヌークスは、触覚的な立方体や球体と、視覚的な立方体や球体を、経験的なプロセス抜きで対応させることができるかどうかということを問うていた。そしておそらくでき

の器官が不十分だったのではないか、という裏にもっともな指摘を忘れたかのように、チェゼルデンの患者の例を挙げてモリヌークスとロックの見解に賛同したうえで、こうした想定を述べている。「ロックは彼[モリヌークス]とともに、光に対して初めて目を開いた先天的盲人は、視覚によって立方体と球とを区別しないだろうということを確認した。それから、この推定は、それが動機となって行われたチェゼルデンの実験によって確認された」(『感覚論』 I, X I, § 1, p.245)。

²¹ 「いくつかの実験から、我々は、光線を網膜上に至るまで追跡することを学んだ。そして我々は、光線が網膜上に判明な印象を形成することを知っている。実際のところは、我々は、そうした印象がいかにして視神経を伝わって心に至るまで伝えられるのかを知らない。しかし、印象が混乱することなく心まで伝えられることは疑いない」(『感覚論』 I, X I, § 4, p.245)。

²² なお、新生児であっても視覚によってある程度の対象認識が可能だということを示す研究も多い。メレル&デュブーなどを参照。

²³ 先述のとおり、視覚を成立させるメカニズムは、意識的な過程ではなく生物学的な発生過程によって構築されるのである。そうして形成されたメカニズムの処理過程も、錯視やゲシュタルトの図と地の転換のような特殊な場合には垣間見られることもあるが、通常は意識されることはない。そうした意識に先立つ二つの過程を、ともに意識内の過程として抜おうとしたのがロックやバークリの知覚論だったともいえる。

ない、と考えた。

ロックはこの問題を、網膜に映る「平たい円形」から「立体的な球体（の見え）」が構成されるのはいかにしてか、という問題にかかわるものと受け取った。ロックは、網膜像であるところの「平たい円形」が、我々の心への与件でもあると考え、つまり我々が実際に見ているのは「平たい円形」であると考え、それが立体感をもって見えるのは習慣によって無意識化した判断のおかげだと主張した。『人間認識起源論』でのコンディヤックは、こうしたロックの混乱をよく見抜いたのであった。

パークリは、「心の変様」であるはずの視覚が、どうして外的対象の認識を与えるかのよう
に思えるのかという問題を提起し、それに答えると称して、実は別の問題であるはずの、視覚
によって対象の距離や大きさや位置がどのようにして判断されるのかという問題を検討した²⁴。

前者の問題が後者の問題によって答えを与えられるとパークリが考えたのは、我々の心への
視覚の与件が二次元的なもの（平面的、という意味ではなく、奥行き方向を持たない漠然とし
た広がり）だと考えたからであろう²⁵。しかし、『人間認識起源論』でのコンディヤックが指摘
する通り、我々は（目が悪いのでなければ）決して漠然とした奥行きのない像を見ることはな
く、ある独特の奥行き感、立体感を伴ったものが、延長の中に配置されているのを見る。対象
の距離や大きさは、対象が置かれている空間全体のテクスチャの勾配によって見て取れる。つ
まり我々は、視覚のみによって、距離や大きさを見て取ることができる。

しかし、そうした見え方がそもそも心の変様にすぎないと言われれば、それを否定すること
はなかなか難しい。外界が見えているようでいて実は夢だった、というデカルト的懐疑はぬぐ
い去れない。つまり、視覚によって距離や大きさを判断できるように思われたからといって、
視覚が外的対象の認識を与えるとは断言できないということである。実際のところ、パークリ
は『人知原理論』では、距離や大きさなどの触覚的観念も心の変様であると主張することにな
るわけである。

このように、「視覚による外的対象の認識」をめぐる当時の議論はなかなか混乱したもので

²⁴ 言うまでもなくパークリの議論の目的はむしろ逆、つまり常識的には距離や大きさを判断していると思
われている視覚が、「心の変様」にすぎないことを示すことにあった。モリヌクス、ロック、コンディヤ
ックとは逆向きの問題意識であるが、ここでは、彼らの議論とパークリの議論を並べるために、パークリ
の議論の向きを逆にして整理した。

²⁵ 「これまで我々が示してきたことからの、ひとつの明白な帰結は、空間、外在性、離れた場所に位置する
事物などの諸観念は、厳密に言えば、視覚の対象ではないということである」（『視覚新論』§ 46,p.48）。「私
が見るものは光と色の多様のみである」（『視覚新論』§ 103,p.88）。ただしパークリは、ロックとは異なり、
網膜像を心への与件と同一視することはない。むしろ網膜に投影された像は、触覚的だというのである。

「像（picture）といわれているものは、上述のように放射状の光束が交差し屈折したあとに形成されるの
であるが、これは、真実には像（picture）というよりむしろ模像（image）というべきものである。すな
わち形像（figure）、あるいは投影像（projection）、それも、触覚的光線によって触覚的網膜に投影される
触覚的形像なのである。そのような触覚的形像は視覚の固有な対象では決してありえないので、視覚によ
って知覚されることは絶対になく、徹頭徹尾その本性からして触覚的な種類のものである」（『視覚論
弁明』§ 50,p.173）。「それゆえ、像というものは、全く異なり異質な二種類のものであり、二通りの意味
において理解することができる。すなわち、一つは光と影と色から成るものであり、もう一つは本来像と
いうよりむしろ網膜に投影された模像というべきものである。従って私は、区別のために、前者を像
（picture）、後者を模像（image）、と呼ぶことにしたい。像は視覚的なものであり、視覚に特有な対象で
ある。模像はそれとは全く異なり、生来の盲人であっても完璧に想像し理解し把握することのできるもの
である」（『視覚論弁明』§ 51,p.173）。

あった。『人間認識起源論』のコンディヤックは比較的クリアに問題を見通していたように思える。ところがデイドロに『人間認識起源論』は観念論的ではないかと指摘されてしまった。そのときに彼は、「我々は天に昇ろうと地獄に落ちようと、自分自身の外に決して出ることはない」、つまり視覚を含む感覚が「心の変様」であるという主張を捨てることができなかった。そこで、『感覚論』では、視覚において知覚されている奥行き感や立体感や延長が、実際に奥行きや立体や空間を示していることを論証せざるを得なくなった、ということなのであろう（このときはコンディヤック自身も混乱していて、視覚の最初の状態を「光る雲」などと書いてしまったのではあるが）。

6. 『感覚論』における視覚と触覚についての議論

以上のようなことを念頭に、『感覚論』における視覚と触覚についての議論をもう少し具体的に見ていくことにしよう。

先述のとおり、「視覚のみに限られた人間について」（『感覚論』I, X I, p. 243～）の議論は、視覚の器官が完全に機能しており、それゆえ視覚における知覚が完全に成立している状態から出発する。そうした状態において、奥行き感、立体感（とのちに呼ばれるようになるはずのもの）はすでに含まれている²⁶。また、視覚の知覚が何らかの延長を有していることも前提されている²⁷。前節で検討したことからすると、そうした視覚における見えが、「実際の」奥行きや立体や空間を示しているかどうかが問題であるはずだが、コンディヤックはそうした問題についてはさしあたり扱わず、まずは視覚のみから得ることができる認識がいかなるものであるかを明らかにしようとする。

それは第一に、色の種類の識別である。「立像」は、視覚的延長の中に含まれる色に順々に注意を向けることでそれらを分離し、分類する²⁸。まずは赤が目を引き、それから黄色、さらにもうちょっとやさしい色へと順次注意が向けられていく。次いで、色と色との境界線を眼で追うことによって形を認識する²⁹。そうした注意のはたらきがないと、視覚的世界は、複雑な絵をちらっと見たときと同様に、漠然とした全体として感じられる³⁰。

²⁶ コンディヤックは、おそらくパークリに引っ張られて、視覚が与えるものは光と色だけで、それらは自己の存在仕方である、などと論じるのだが（『感覚論』I, X I, § 2, p. 245 など）、彼の議論の趣旨を考えると、奥行き感や立体感など（とのちに呼ばれるようになるはずのもの）も視覚に含まれていると解釈すべきである。

²⁷ 「色の感覚は、それが変様させる魂において延長を呈する。なぜなら、色の感覚は延長そのものだからである」（『感覚論』I, X I, § 8, p. 248）。

²⁸ 「最初の瞬間において眼の中に広がり、眼底を占める色の中には、立像が特定の仕方では区別してそれだけを分離して見る色が一つありうる。快さがその色への注意をある強度で規定したのである」（『感覚論』I, X I, § 4, p. 245）。

²⁹ 「一つの色について認識するためには、目はそれを見れば十分であるが、ある形の観念を形成するためには、目はその形を見るだけでは十分ではない。目は、最も単純な形の全体を把握するにも、それを分析しなくてはならない。つまり、その諸部分に順番に気づくことが必要なのである」（『感覚論』I, X I, § 8, pp. 248-9）。

³⁰ 「他の質と共に与えられた二、三色に対する立像の関係は、あまり複雑ではないが身近ではない主題が描かれた絵と我々との関係と同様であるというのはありそうなことだ。最初我々は細部を混乱した形で知覚する。…いくつかの色が立像の網膜上に判明に広がっており、立像がそれらの色を見るときも、立

この「漠然とした全体として感じられている状態」が、視覚の最初の状態が「光る雲」のようなものだと言っていることの内実であろう。

よく似た二つの絵を比較して「間違い探し」をする、という遊びがあることから明らかなように、我々は見えているものすべてに気づいているわけではない。そして、見えているものの中には、赤色のものなど、目を引くものがあることも確かである。さらに、よく似た色と似ていない色があつて、色をその質の類似性によって分類することができ、また似ていない色同士の境界は輪郭として現れる。

コンディヤックが「視覚のみに限られた人間」について論じるのは、こうした視覚的世界の現れを分析すること（具体的には、諸部分に順々に注意を向けていくこと）である。そうすることで「立像」は、色や、それが広がっている範囲としての形についての認識の獲得することができる、というのである。

ところが、視覚の知覚のみを分析しても、それが何らかの外的対象と対応していることは分からない。そこでコンディヤックは、視覚の分析を一通り終えた「立像」の視覚認識が、やはり「あいまい」で「混乱している」と書くことになる³¹。

彼は、外的対象についての認識を与えてくれるのは触覚だけだと言う。「触覚」といっても手触りや温冷の感覚ではなく、対象を操作することが重要である。なにか動かないものを押したときに感じる抵抗の感覚が、自分の意のままにならないもの、自分ならざるものを発見させてくれる³²。そして、触覚が視覚を「教える」ことによって、「立像」は視覚によって外的対象を認識することを学ぶ、というのである。

その触覚による教育はいかにしてなされるのか。触覚的对象を操作することで生じる変化とそれに伴う視覚的对象の変化とを対応付けることで、触覚的对象そのものと視覚的对象そのものを対応付ける、あるいは触覚的对象に視覚の知覚の質を帰属させるということが、触覚による視覚の教育といわれるものの内実である³³。

像の観点からは、そうした色は実際に混乱しているのと同様に混乱して見えるのである」（『感覚論』Ⅰ，XⅠ，§4,p.246）。

³¹ 「輪郭付けられた大きさ、つまり形に気づかせるのは触覚のお陰であるとする、色の中に位置と運動に気づかせるのもまた触覚である。立像は、延長についての混乱した曖昧な観念しか持たず、形や場所や位置や運動の観念を全く持たないので、立像は単に自らが多くの仕方では存在すると感じるだけである」（『感覚論』Ⅰ，XⅠ，§9,p.249）。

³² 「音や色や匂いの感覚においては、自らの身体を認識しない魂はそうした感覚を自らの変様として知覚し、そこに自らを再認し、また自らをしか認めないのであるが、固さの感覚においては事情が異なる。なぜなら、固さの感覚の特性は、相互に外部へと排除しあう二つの物を同時に表象することであるから、魂は固さを、その中に自分自身をしか見ない変様の一つとしては知覚しないのである。魂はそれを一つの変様として知覚するが、その変様において魂は相互に排除しあう二つのものを認めるのは必然的であり、その結果魂は二つの物を知覚するのである。／これが魂に自らを出て外部へと向かわせる感覚であり、人はいかにして魂が物体を発見するかを理解し始める」（『感覚論』Ⅱ，V，§3,p.256）。

³³ 「偶然によってであれ、突然の強い光によって引き起こされた恐怖によってであれ、立像は手を目の前に持ってくる。その瞬間色は消える。立像が手を引っ込めると色は再び現れる。こうしたことから、立像は、色を自己の存在仕方であると見なすのをやめる。立像は、自分が触る対象を指の先に感じるのと同様に、何か触れないものを目の端に感じるのだと思う」（『感覚論』Ⅲ，Ⅲ，§3,p.279）。

「立像が手を視覚の器官の外側にある表面の上に持ってくると色が見えなくなり、手を引っ込めるときに色が見えるようになることから、色がその表面そのものの上にあるかのように現れたり消えたりするのを立像が見るはずであるのは必然的であり、こうしたことから立像は色に延長を与え始める」（『感覚論』，

とはいえ、そうした議論の最後に彼は、『人間認識起源論』で批判したロックそのままに、視覚の対象はもともとは「平たい円形」で、それが触覚のおかげで凹凸をもって見えるようになる、などと書いている³⁴。しかし、彼の議論をたどる限り、そうした見え方の変化が触覚によって引き起こされるようなメカニズムは論じられていないし、彼のそもそもの議論の前提からしてそうしたことが起こるとは考えられない。実際、触覚と視覚の「対応付け」の議論の後半で、このように述べる。

「触覚は対象を本当の大きさを見ることを目に教えるが、それは触覚が対象の諸部分を識別することを目に教えるからにはかならない。こうした教育が可能なのは、諸部分が網膜のうえにおいて判明に辿られる限りにおいてである。なぜなら、目は、自らの感覚の中に含まれていなかったものに気づくことはできないからである」(『感覚論』Ⅲ,Ⅲ, § 22, p. 285)。

視覚の知覚は初めから判明で、触覚の教えを受けようと変わることはなく、むしろ変わらなからこそ、触覚と対応付けることもできるのである。

7. コンディヤックの問題意識はなんだったのか

ここまで、『感覚論』の議論の主要な目的を、視覚においてすでに知覚されている奥行き感や立体感や延長が実際に奥行きや立体や空間を示していることを論証することである、と解釈して概観してきた。そして彼の議論の内実は、視覚におけるものの見え方そのものの成立ではなく、すでに成立している視覚の知覚と、触覚の知覚との対応付けであることを見てきた。

こうした『感覚論』での議論は、「視覚の成立」を述べるものであるというよりは、視覚の知覚がすでに成立してしまっているところから出発して、そこにおいてさまざまな知識を発見していく過程を描いたもの、というべきではなからうか。

いままで、『人間認識起源論』で述べていることのほうがもっともらしいと繰り返してきたが、そのように考えるなら、実のところコンディヤックの主要な関心は『感覚論』でも全く変わっていないということができる。つまり、両著作とも、器官そのものの発生を扱うような、神経科学的な問題は彼の思考の射程外で、完全な状態の器官が与える知覚の世界からいかにして認識を引き出すかということがいつも変らぬ彼の問題意識なのである³⁵。

また、こうした観点から考えると、『感覚論』のほうが『人間認識起源論』よりもむしろ進んだ論点を盛り込んでいるともいえる。視覚のみによって、つまり対象を離れて単に観察することによって得られるような認識は、知覚の質の類似性のみに基づく分類にすぎず、あいまい

Ⅲ,Ⅲ, § 4, pp.279-280)。

³⁴ 「立像が初めて球に目を向けた時には、立像が受け取る印象は、陰と光が交じり合った平たい円形を表象するに過ぎない。…しかし、立像はそれに触り、触覚によってもたらされるのと同じ判断を持つことを学ぶのであるから、その物体が手のもとで持っている凹凸を目のもとでも取るようになる」(『感覚論』, Ⅲ,Ⅲ, § 11, p.282)。

³⁵ いや、神経科学的な知識も、結局は知覚の世界に現れたさまざまな証拠を分析することで得られたものなのだから、彼の「認識起源論」の中に位置づけられるべき場所を持っているはずだ。コンディヤックの理論は、さまざまな認識が結局のところ知覚に現れた証拠にもとづけられていることを、知覚からの認識の発生過程をたどることで論証しようとするものなのである。経験論哲学をこうした方向で解釈し展開したものとして、拙著『人間科学の哲学』を参照。

ないし主観的なものにとどまるのに対し、対象を操作しその変化を観察するような仕方を得られた知識は、対象の側にも根拠を持つような客観的な知識たりうる、という論点である。こうした、操作的な仕方での認識の理論を展開した点で、彼の理論は、たとえばラヴワジエによって受け入れられ、かの化学革命を準備したのである³⁶。

8. おわりに：「観念論者」コンディヤック

一般に、『感覚論』でのコンディヤックの議論は、「知覚の成立」を論じるものだと解釈されることが多いが、本論では、彼の議論はむしろ、すでに成立してしまっている知覚的世界において認識を発見していくことを論じたものだと解釈するにいたった。触覚は視覚を教育するものであるというよりは、視覚的世界を探求し、そこにいまだ気づかれぬままに含まれているものを意識化するための手段なのである。

視覚は触覚の影響を受けようと変化しない。それゆえ、無意識化された判断と称するものが本当に存在するならば、それをもう一度意識的にたどり直すことができるはずだ。もしもたどり直しが不可能であるならば、そうした無意識的判断は虚偽だということになる。

こうした意識的なたどり直しによって、すでに持っている知識の正当性を問い直すことこそがコンディヤックの「認識起源論」の眼目であると思われる。実際のところ我々は、この世に生まれて以来の自分が知識を獲得してきた過程をほとんど覚えていないのだから、我々が持つほとんど全ての知識がこうした意識的なたどり直しの対象になる。彼は無意識を認めず、何が何でも意識化しようとする。このあたりに彼の哲学の真骨頂があると思う。

では、視覚において知覚されている奥行き感や立体感や延長が実際に奥行きや立体や空間を示していることを論証するという、『感覚論』の執筆の動機はどうなったか。デイドロの批判にうまく答えられたといえるのか。最後にこの点について論じて、まとめとしたい。

この問題を解決するためにコンディヤックがとった戦略は、視覚的对象と触覚的对象とを対応付けることであつた。しかし、なぜそうした対応付けが可能なのか？

バークリの場合、触覚が与える奥行きや距離などの観念は、視覚が与える観念とは異質であることが強調されており、おそらくそれゆえにこそ、対応付けよりは、視覚における見え方を変質させるような「無意識的判断」が持ち出されたのであろう。異質なもの同士を対応付けることはできない。

バークリはそう言うが、事実問題として触覚的对象と視覚的对象はたいていの場合対応付けることができ、またそうした対応付けの軸となるようなもの（コンディヤックの議論では、抵抗として現れる触覚的对象）に、嗅覚や聴覚や味覚の知覚が与える質も帰属させることができる³⁷。そうした対応付けが可能であることから、我々は知覚的質の原因となるような、何らか

³⁶ コンディヤックの哲学とラヴワジエの化学との関係については、拙著『コンディヤックの思想』第5章などを参照。

³⁷ 我々の日常的な経験では、触覚的对象が他の知覚の質を帰属させる軸になるというよりは、視覚的对象が軸になり、我々は視覚でものを確認しながらそれを触覚によって形をなぞったり操作したりし、また視覚的世界の中に音源や匂いのもととなるものを探したりするのであるが。

の外的対象が実在することを推定する、ということも事実だろう。

しかし、視覚が外的対象の表象であることを示すためには、そうした対応付けがなぜ可能なのかを論じるべきではないのか？つまり、触覚的对象が、視覚的对象の原因でもあるような何らかの実在を指し示していることは、なぜ保証されるのか？

いや、むしろここで「なぜ」を問うことは、形而上学的ないし神学的議論に突入してしまうことになるであろう。コンディヤックは、『人間認識起源論』の序論で、ものごとの第一原因を探求しようとするを「高望みをする形而上学」であるとして批判し、有限な人間精神によって捉えられることのみを知ろうとする、「慎ましい形而上学」を称揚する³⁸。こうした形而上学にのっとなって彼は、知覚の原因としての「物自体」のような不可知のものを想定することを拒否し、経験可能なものである触覚の知覚を物自体に代えたのである。

かくして、彼の立場は、バークリとは別の前提と動機にもとづきながらも、「存在とは知覚である」という立場に近づく。つまり、コンディヤックが、視覚の知覚が外的対象を示すことを論証するために、視覚を、触覚という別の知覚と対応付けようとした限りにおいて、彼の哲学の「観念論的性格」は拭い去ることはできないというべきだろう。

とはいえ、近代科学は、「原因としての神」にご退場いただいて、この「慎ましい形而上学」を自らの哲学として発展していくことになる。

引用文献一覧

コンディヤックの著作は、章節およびル・ロワ版全集 (*Ouvres Philosophiques de Condillac* Vol. 1, PUF, 1947) のページで示した。『人間認識起源論』については小茂田宏訳の岩波文庫版のページも合わせて記した。ただし訳文は、同訳書を参考にしながら私が訳したものである。

『起源論』*Essai sur l'origine des connaissances humaines*, 1746, *Ouvres* vol. 1, pp. 1-118. (小茂田宏訳、岩波文庫、1994) .

『感覚論』*Traité des sensations*, 1754, *Ouvres* vol. 1, pp. 219-317. (加藤周一・三宅徳嘉訳、創元社、1948) .

J. J. ギブソン『生態学的視覚論』古崎敬他訳、サイエンス社、1985、原著は1979.

デイドロ『盲人書簡』吉村道夫・加藤美雄訳、岩波文庫、1949、原著は1749.

鳥居修晃「先天盲における開眼手術後の視覚とバークリ」、『視覚新論』pp. 277-329, 1990.

鳥居修晃・望月登志子『先天盲開眼者の視覚世界』東京大学出版会、2000.

バークリ『視覚新論』下條信輔・植村恒一郎・一ノ瀬正樹訳、勁草書房、1990、原著は1709.

³⁸ 「二種類の形而上学を区別しなくてはならない。一つは、高望みをする形而上学であって、それはあらゆる神秘を見透かそうと望む。存在するものの本性と本質、最も深く隠された原因、こういうものがこの種の形而上学の野心をかきたて、またこういう謎こそそれは解明しようと考えるのである。もう一つは、より慎ましい形而上学であって、それは自らの探求を人間精神の非力さに釣り合わせようとする。この種の形而上学は、自らを逃れることについては気にせず、自らの捉えようことのみを求める。自らに定められた限界の中にとどまることを知っているのである」(『起源論』intro.p.3/上p.14)。

- フーコー『言葉と物』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、1974、原著は1966。
- メレル&デュペ『赤ちゃんは知っている—認知科学のフロンティア』加藤晴久・増茂和男訳、藤原書店、1997、原著は1990。
- 山口裕之『コンディヤックの思想』勁草書房、2002。
- 山口裕之『人間科学の哲学』勁草書房、2005。
- 山口裕之『認知哲学』新曜社、2009。
- ロック『人間知性論』大槻春彦訳、岩波文庫、1972、原著は1690。
- Gibson, E. J., & Walk, R. D., The visual cliff. *Scientific American*, 202, 64-71, 1960.
- Hubel, D. H., & Wiesel, T. N., Receptive fields, binocular interaction and functional architecture in the cat's visual cortex. *Journal of Physiology* 160, 106-154, 1962
- Georges Le Roy, *La Psychologie de Condillac*, Boivin, 1937.
- Le Vay, S., & Stryker, M. P., & Shatz, C. J., Ocular dominance columns and their development in layer IV of the cat's visual cortex: A quantitative study. *Journal of Comparative Neurology*, 179, 223-244.
- C. von der Malsburg, Self-organization of orientation sensitive cells in the striate cortex. *Kybernetik*, 14, 84-100, 1973.
- Voltaire, *Eléments de la philosophie de Newton*, 1738 (引用は eds. by Robert Walter & W. H. Barber, Oxford, 1992 より)